

カロッサにおける“非政治的人間”の考察  
—クリスティアーネ・ドイセン『自己是認と回想』より—

村 山 正 雄 訳

Betrachtungen eines Unpolitischen bei Hans Carossa  
—Aus Christiane Deußens: “Erinnerung als Rechtfertigung”—

Masao MURAYAMA

要 旨

カロッサがナチス体制時代を回想した生活報告（『異質の世界』）に寄託したいくつかのメッセージ，1）二重生活，2）内面性，3）別のドイツ，4）ドイツの悲運について検討。そのよって立つ基盤の脆弱性を論述。

キーワード：第三帝国 (Das Dritte Reich), ハンス・カロッサ (Hans Carossa), 国内亡命 (Innere Emigration), 『異質の世界』 (Ungleiche Welten), 自伝 (Autobiographie)

一) 二重生活

カロッサの試みは，ファシズムの文化政策の枠組みにおいて公的に関与したことが脱現実化され，自己のアイデンティティをいわば損なわれることなく

“第三帝国”という異論の多い時期を切り抜けさせることであったが、耐えたのは一時的に過ぎなかった。“非政治的”詩人なる自負と、持続して体制に順応していったプロセスによって表れるような実際の振舞いとの間での矛盾は、彼の生活報告『異質の世界』においても明らかになっている。国家社会主義における生活の内面分裂をカロッサは間接的に認めて、その自己描写のある箇所では彼の“二重生活”について語っている：“私は再び多くの他のひとびとと同様に二重生活を暮らした”ということである。<sup>217)</sup> 1942年のある手紙の中で、国家社会主義の文化機関とのそれまでの経験を表現すると見なされうる、独自の生活企図がさらに詳しく説明される：

われわれのような人間は、二重-生活を営まざるを得ないのです。その一方は彼らが要求をあきらめない外的な世界、他方は寂寥と静寂のうちにある…<sup>218)</sup>

ゴットフリート・ベンとの比較がおのずと浮かんでこよう。はるかに複雑なベンの二重生活-構想とは、彼の伝記においては、まさに当初の親ファシズム的関与から“軍隊への貴族的亡命”への転換点を表しているのであり、したがってその限りではファシズムの公然活動からの退却動作を意味しているのだが、カロッサはその“二重生活”という概念を、内心では同時に反対の態度をもちながら次第に“第三帝国”において順応的に振舞ったことを特徴付けるべく用いているのだ。カロッサにとって“第三帝国”における彼の生活を二重生活と説明することは紛れもなく正当証明機能を有する：自己の実存が分裂することによって、一つには外部に向かっては体制的な役割へ、そして一つにはそこからは表面上は動かされることのない作家という存在、社会からは離れてあり、自己実現の場所と見なされる存在へと自己の実存が分裂していることによって、政治的な要請には買収されない生き方という幻想が維持されるのである。“それが、決断せざるを得ない二重の形態での生活です”，とカロッサは1942年の別の手紙で書く，“しかしおそらくわれわれは、二重-実存という消耗のきつい

責務から自由にしてくれる、外的な世界の変転を前にしているのです。”<sup>219)</sup>

“第三帝国”における自己の振舞いについてのカロッサの解釈は、結局は外面上の役割行動と同時的な内面への亡命という分裂症的な区別となっている：そのさい、公的な場への登場はひとえに強要された仮面劇として、いよいよ高く格付けられた内面性が優位になるべく大々的に否定され、その内面性のためには“潜在的な反ファシズム、不正と野蛮に対する感情的な拒絶”<sup>220)</sup>が必要とされるのである。精神と世界、芸術と政治の対立は、この自己描写の表題“異質の世界”がすでに綱領的に先取りしており、またハンス・カロッサのような市民的・保守的な志向をもつ作家の思索構造にとってはきわめて特徴的なのである。こうした対立は、主観的な振舞いというレベルにおいては、推定上の“非政治的”地点への退却へと通じるが、このような姿勢が持っている政治的に操作されやすい可能性については、併せて反省されることはない。後になってもカロッサは、この内面性が、国家社会主義の諸目標にとって多面的かつプロパガンダ的な利用可能性に根ざすゆえに、絶えず危険にさらされていることに対しての洞察を拒んでいる。カロッサが1943年にカール・ローテ宛ての手紙でみずから自分の公的機能について“お飾りの調度品”だと語り<sup>221)</sup>、それによって自分の役割を、ファシズムの文化—およびプロパガンダ政策のリベラルな看板であるとの的確に定義しているのであれば、彼はそれにもかかわらず、いかなる時点でもこの認識から彼個人の結論を導き出してはいなかったのだ。

“第三帝国”におけるカロッサの二重生活は、たとえ彼が自己描写の中でこのような印象を与えようとしているにせよ、よそから強要されたのではない。“二重-実存への責務”<sup>222)</sup>という表現は、その点では紛らわしい。むしろ彼の人生行路は、公的な方面から重要な働きを受諾すべき要請が彼に対して出されるやいなや、主観的なあらゆる留保にもかかわらず、最終的には自らの疑念や原則を厭わず犠牲にしたことを示している。かろうじて聞き取れるが、すべて“公的なこと”に対する自信のなさ、そしてそれに結びついて驚くべき権威隷属性と、カロッサがすでに早い時期にそのシステムの不正な性格を認識していたにもかかわらず、国家社会主義の官僚機構をも恐れはばからない階級制構

造への依存，それらは彼の極度に妥協性の余地を残す振舞いにとっての因果的要因として考慮に値する。自己の良心を批判力のないお上隷属と大幅に取り替えてしまうという，広範な市民階層にとって典型的な臣民意識が，カロッサの順応的振舞いに対して釈明責任があるように思われる。

よくあるような文学的抵抗についての形式や戦術を原則的に考慮することは，自らの反省の枠を超えており，意識的にフェードダウンさせられている。つまり，彼の生活報告の別の箇所にも簡潔な理由が次のように言っている：

事態の進行を押しとどめるのは，あたかも誰かヴァイオリンの弓一本で灼熱する溶岩流を止めようとするほどに，考えられないことだった。<sup>223)</sup>

はじめからこのような具合に反ファシズム活動の見込みの無さが申し立てられているとあって，それで自らの“参加”が正当化されるものではない。それは疑惑を生まない“カタコンベ生活”<sup>224)</sup>を意識してただ受動的に耐え抜くことより以上なのだ。けれども，自分の体面を傷つける振舞いの脱現実化をつうじて“第三帝国”における“非政治的”作家という自己像が維持されることで，— このばあい，信頼性という理由から秘匿されえなかった個々の順応の局面は，国家社会主義の権力者に強いられた譲歩と暗示される — 自己の人物像は，“教養ある人々”<sup>225)</sup>，“実情を飲みこんだ人々”<sup>226)</sup>，そして“沈黙して傍観することだけが残されて（いた，；C.D. 註）”，“冷静な人々”<sup>227)</sup>に問題なく分類されるのである。二重生活の欠陥は，（・・・）“均一に秩序化され，滅菌消毒された国家の中であえぎ（・・・），すべての華やかな栄光をとおして，何か不吉なことが起こっているのを感知していた”という，あの“思慮ある”，“深い洞察をするドイツ人たち”<sup>228)</sup>に具現化される共同体によって，見かけ上は破棄されている。

しかし，自己自身を精神的エリートと把握している作家の社会的責任に対する問いかけは，結局のところ視界には入ってこないのである。そうする代わりに，カロッサは問題を投げかけるのだ。ファシズムのように，そもそも硬直

した構造を持つ社会において、文学は如何になされうるのか：

しかし著述する人々は、彼らは圧迫され、偽造された生活の空気の中で、いかにして開花させるべきだったのだろうか？ 少なくとも内心でなおあの崇高の自覚を名残でもいかにして維持すべきだったろうか、その自覚がなければまさしく真の才能は現れないのだが？<sup>229)</sup>

ようするに、ファシズムの現実は無抵抗では従属するまいとする文学に、どのような可能性があるのか、あるいは、“文学的抵抗”にはどのような表現形式が考慮に値するのか、といった問いを真摯に検討することはなく、もっぱら本来の問題は、主観的であるとともにエリート的な自己-保存にあると思われる。つまりは、“詩人”という個別的な優位性の防衛なのであり、この詩人ということが、一人で申し立てた“崇高の自覚”によって彼の周囲の人々と一線を画すのである。このように超時間的価値の叙述へと固定された文学は、社会的現実性、そこから生じてくる要請からは、常に原則的な社会的自立性を暗示して遁れうるものであり、事実またファシズム支配の存在によって現実に動揺させられることも危うくされることもない。同様に、その文学自体も、逆の方法で国家社会主義の政治的目標の遂行に対して、実際の危険とはなり得なかったのである。

## 二) 内面性

国家社会主義の文化政策はどのような方法で、詩人という概念の中に濃縮された“内面性の権威を防護する総督”<sup>230)</sup> という表象を利用できたのか、その息苦しいまでの実物教育を、まさしくハンス・カロッサの実例が提供している。しばしば論議された“内面への退却”は、その限りでは、“第三帝国”において変化した社会内部の勢力関係に対して特定された回答だとは理解されるものでなく、むしろ一つの文学理解に対応する。それは、彼の自身の本質規定が原則的に歴史的視野を欠く、“非政治的”姿勢に基づくと見ており、それゆえに初

めから社会政治的影響にたいするさらなる要求は放棄しているのである。この関連で、1917年のカロッサの書簡は有益である。その中で彼は自分の戦争体験の個人の結論として詩的信条を告白している：

・・・戦後の私の生活は、なお一つが贈られるならば、芸術より他の事柄には決してささげられないでしょう。欧州の国々は倒壊し、巨大な軍隊は滅び、王座は消滅するかもしれません。しかし、ひとたび人間の内心からまったく真実に生き生きと生成してきたものは、たとえ時代の渦巻きが一時の間は錯綜させようが、いつもいつかはまた現れる、そのことを信じています。<sup>231)</sup>

政治の世界に対する絶縁をカロッサは後にさらに明確に述べている。ヴァイマル共和国最後の数ヶ月の緊迫する政治的展開を感じつつ、彼は内面的-受動的姿勢を唯一意義あるものと説くのだ。1932年8月のある手紙では次のように書かれている：

現今において内面に自分の国を建てることができず、あるいは精神の国で仕えようとならない者は、いずれかのヒステリックな吠え猿の輩に追随せざるを得ないでしょう。<sup>232)</sup>

彼の政治嫌いの姿勢を裏付けることになる国家社会主義者たちによる政権掌握ののち、そして、“ドイツ文芸アカデミー” 招聘を拒絶してのち、カロッサは内心の拒絶姿勢をさらに断固として強調する。彼の出版人アントン・キッペンベルクの妻に宛てて1933年5月に書いている：

新しい国家は己が望むままに調度を整えればいいのです。わたしはわたしの小さな精神の国を自由に独立して守りますし、そのことによってこの民族に最良の奉仕をすることになると、固く確信しています。<sup>233)</sup>

純然たる内面性という位置への退却は、けれども“第三帝国”が権力を強化する過程においては実現不可能であることが明らかになる。彼が内面的な抵抗姿勢をとりながら後には国家社会主義の権力者に譲歩してゆくさまは、このような超時間的な内的価値に固着した姿勢が構造的に抵抗力の弱いことを示している。政治の介入からは最終的には逃れられないのだ。逃れがたく思われる順応過程のカロッサのあとからの釈明は、彼もその罪を犯したのだが、“精神の裏切り”<sup>234)</sup>を減少させたり、起こらなかったことにはできないのである。国家社会主義の文化-宣伝政策の枠組みの中で事実上協力しながら“自由な人間でいる”<sup>235)</sup>という、彼の恒常的な自己欺瞞は、かれの迎合的振舞いによってファシズムの支配を客観的に支持し、そのために内面性という固有の地位の信用を落としたという事実を、なんら変えることができない。Ernst Loewy が的確に表現しているように<sup>236)</sup>，“第三帝国”の制約のもとにおいては“洗練された「無邪気」は意図せざる共同正犯”となるのであれば、これはますますカロッサの国家社会主義の文化機関に対する妥協的姿勢に当てはまる。それらの機関は、かれの代表という役割に資する協力から、国内外におけるファシズムの文化政策の自己表現のためのプロパガンダ上の利益を引き出していたのである。

### 三) “別の” ドイツ

“異質の世界”，すなわち和解しがたく相対している世界を、ハンス・カロッサは国家社会主義の時代への自伝的回顧において確認している：“憎悪”と“虚偽”に特徴付けられる<sup>237)</sup>ファシズムの暴力国家という世界、そして“静かな、人知れず生成するドイツ”<sup>238)</sup>という世界であり、このドイツが、戦後の時代において不当にも忘れ去られ、いまや復権させられるべきなのであった。特に、全ドイツ人の集団責任なるものを巡る論議が、“全般的な治癒という静かで偉大な事象を阻み、起りうるいかなる自省をも挫折させて”（しまった；C.D. 註）のだが<sup>239)</sup>、彼の意見にしたがえば、“第三帝国”の真っ只中でひそかに生き延び続けていた“別の”ドイツの功績が顧みられないことにその責任があるのだ。

この“ひそかな”，“最も深いところでは犯されることのない”，そして“征服されない”ドイツ<sup>240)</sup>に，遅ればせに権利を得させることが，彼の生活報告の中心的課題であると，カロッサはみなしている：。

しかし善い意思を持つ人間たち，迫害されている人々を微弱な力で助けようと努めることであの生活を耐え抜いたひとびと，彼らのことを，かつて誰が語っただろうか？（…）

いつでも，どこでもそうであるように，ここでも世界の不滅の治癒力が多くの顧られることのない，ささやかな行為のなかに育っていたのだ。それらについては，新聞もラジオ放送も報道しない。<sup>241)</sup>

作家たちは，彼らだけではないとしても，“別の”ドイツの本来の代表者とみなされている。彼らは“カタコンベ生活”<sup>242)</sup>にありながらも，国家社会主義の中でゲーテの人間主義的伝統にある，“あの埋没してしまったドイツへの憧れ”<sup>243)</sup>を生き生きと保っていたのだ。疑わしさは無いが政治的には影響力をもたないこの遺産は，その文脈においても特有の振舞いが示されており，カロッサによって以下のように弁明されている：“最良の人々や，誇り高い人々がどのように沈黙へと強いられたか，今日ではわずかの人々にしか知られていない”<sup>244)</sup>と述べ，彼自身の言い訳のために，“偉大な勇気あるリカルダ・フーフ”の振舞いを指摘する。“この女性は，われわれすべてが沈黙したように，ついに勝者の軍隊が進出して女性詩人の声を取り戻すまで，沈黙したのだ。”<sup>245)</sup>カロッサが遅ればせにリカルダ・フーフと自己を同一視したことは，いくらかの文学史家に憤激を引き起こした。Hansgeorg Maierは，“カロッサが無風流にもリカルダ・フーフのような女性のすばらしい確固不動性を彼自身の右顧左眄にたいする背面援護に改鑄しようと企図する，うら寂しい大仰さ”<sup>246)</sup>と批判している。

けれどもこの“沈黙”も，換言すれば，“第三帝国”において大抵は何の妨げも無く次々に著述し，出版しながら同時に政治的には隠棲していることなの



であり、これがどのように、戦後の時代には“国内亡命”という弁護的な概念で標示され、嫌疑がかけられ、そしてたとえ不本意ではあったにせよ、国家社会主義支配による後援をうけていたという非難にさらされていたのか、カロッサの発言に間接的に反映している。<sup>247)</sup> “国内亡命”の価値と正当性をめぐって、かたやヴァルター・フォン・モローおよびフランク・ティース、かたやトーマス・マンの間で惹き起こされた、有名かつ悪名高い往復書簡による公開討論は、カロッサも注意深く見守っていたようである。彼の生活報告は、部分的には、彼の作家-実存において国家社会主義の文化政策内部での内面的相克を孕んだ役割のゆえに、非難を浴びて疲れ果てて狼狽する人間という観点から、トーマス・マンの言葉に対する直接の回答として読める：

われわれの時代の著作について熟考するということが、後の世界にとってなお努力に値するようであれば、多くのことは今日とは違ったように受け取られるであろう。しかし一つのことは言っておかねばならない：暴力国家の真っ只中で語られた、一つ一つの真に自由な、深く人間的な言葉、秘密警察の影のなかで根源的な独自の原則に従って生じた、一つ一つの真の芸術作品は、あの年月の善意ある魂にとって純粋な励ましであり、代えがたい慰めであった。(…)書物がこれより純粋な熱心さで受け入れられたことはなかった。党の外部にいる詩人たちの公開朗読会に、当時のドイツにおいてほど、聴衆が強く押し寄せたことは、かつてにはなかった。<sup>248)</sup>

“第三帝国”における非・国家社会主義的文学の固有の機能という問いについて、カロッサは明瞭に“善い意思を持つ人たち”<sup>249)</sup> にとっての“代えがたい慰め”を指摘して答えている：“あちこちで抑圧されたり迫害された人が、こうした夢想的に語りだされた言葉を聞き取り、そこからわずかながら慰めと勇気を得ることができたかもしれない。それがすべてだった”<sup>250)</sup> と、生活報告の別の箇所にある。けれども、いわゆる国内亡命を巡る議論の後々の経過の中で不信を招いたのは、まさしくこの内面性の文学のあやふやな慰め機能なので

ある。しばしば引用される、1938年に行われたカロッサの講演“現代におけるゲーテの影響”の結びに関して、Franz Schonauer は批判的に疑義を呈している：

ゲーテの世界を和解させる人間性への信仰告白から語る慰めと確信が、1938年に聴かれた。だが、この講演に内在する悲惨な弁証法が認識されることは無かった。というのは、講演はドイツで行われたのであり、この国を、一切を無視して人道主義的伝統のなかに組み入れ、傷の無い精神の王国の存在を想定しているからである。言い換えれば、素朴に、政治的、社会的状況によっても精神の非腐敗性から出発した、このようなゲーテ講演は、国家社会主義を危うくしないばかりでなく、その贗造傾向に必然的に役立ったはずである。<sup>251)</sup>

カロッサの内面性の文学に対する Schonauer の批判は、次の非難でクライマックスとなる：

彼が文芸を慰めそして避難所として提供しながら、(…)彼は現実から転じ、恐怖の世界の中に非常に芸術的なアルカディアを、自己欺瞞という高尚で社会的に効果のある可能性を創造していた。<sup>252)</sup>

たとえば、“第三帝国”におけるハンス・カロッサ受容にたいして信頼に値する発言の多くが、彼の作品は“ナチ体制の間の生活の耐え難さを多少ともましにしてくれた”<sup>253)</sup>と証明するとしても、それには反論されざるを得ない。たいていは市民階層である読者は、この内面に向けられた文学を通じて、政治的な出来事に対しては、そうでなくても受動的で順応的なものである態度が認められたと感じたにすぎない。この関連で、“第三帝国”における作家たる意図についてのカロッサ個人の見解も有益であるように思われる。それは彼の出版人アントン・キッペンベルクに宛てた1935年7月の書簡にある。そこでは以下の

ようになっている：

…二重に努力せざるを得ないので。私が体験したことを精神で浸透させ、もっとも熱烈なヒトラー信奉者が、もっとも信心深いカトリック者やその他いずれかの信心深い人と同じくらいに同意せざるを得ないようにするのです。<sup>254)</sup>

すでに早い時期から国家社会主義の立場にある読者に対しても摩擦のない宥和的な関係を目指していた、固有の位置の内的矛盾が、この箇所でも明瞭となっており、“別の”ドイツの作家という後からの自己定義に疑問を投げかける。

カロッサは生活報告のある箇所で疑念を認識させたり、外見上は自己批判的に述べたりはする：“われわれはすでに戦時中に（…），われわれが黙り込んだことで、悪事をしている悪人たちをあまりにもはなはだしく強めてしまった”<sup>255)</sup>。けれども故意に一般論的に抑えられた表現がすでに示すように、あまり詳しくは説明されることのない罪が、ひとつの“われわれ”なる定義できない大きなものに負わせられ、自分の過ちは具体的には挙げないのである。

ただ、1939年の一通の書簡に、ファシズムにおける文学の機能を批判的に省察する兆候が認められる。そこでは次のように書いてある：

…すべてのわれわれの優れた書物は、どのような使命を実現するのでしょうか？ もしそれらが破滅への途上にある人間性をなんとか引き止めておくことができないのであれば？ このことを書きつつ、気づいてもいるのです。こういう疑問は間違っていると。かつてと同様に今日でも善きことのために死んでゆく少数の魂が大事なのであり、これらの魂のために他の人々も恩恵を得ることになるのです。<sup>256)</sup>

カロッサは、たしかにかれの生活報告において、“同質化された国家におけるドイツ作家は（…）いかがわしい人物になって（いた；C.D. 註）”ことを

認識している。“かれは黙り込まざるを得ないか、あるいは現代の非常に本質的な現象については黙ってやりすごすことになるか”，この選択は避けられないように思われる。それを超えてカロッサは“第三帝国”における文学の非常に一面的な光景をしか描かない：“奴隷の言語”あるいは別のカムフラージュ技法を利用して、このような方法でひそかに国家社会主義の支配システムを批判する反ファシスト的抵抗の文学といった生き方は<sup>257)</sup>、かれの生活報告では完全に度外視されており、そのために作家にとってあり得べき、現実的な態度選択の多様性は性急に削減されるのである。

カロッサの試みは、ファシズムの暴力国家の真っ只中にある“別の”ドイツの生存を主張することであったが、結局のところ、自己の振舞いが唯一可能で意義あるものだと弁明し、同時に怪しさのないことを現すために役立てられる。戦後の時代における公然たる攻撃に説得力ある反対ができるため、ゲーテを継承する古典的人間主義の伝統が“第三帝国”において外見上は妨げられずになおも継続していたと、積極的なドイツイメージに立ち戻りつつ、個人の一貫性と無傷性の証明までが提出されるはずであった。カロッサの市民的・保守的読者層は、この種の和解的な“過去の克服”を安心して受け入れたのであった。ファシズムの暴力国家の現実性に対するに、“別の”ドイツなる対抗モデルは、共同責任-論議によって一般に不安感が掻き立てられた後には、同一視のためには好都合の提供物件を具現していたのである。

全般的な追及はかわすことはできたように見えるが、秘密の、精神的な対立勢力なる遅ればせの産物の疑わしさは、しかしながら“第三帝国”におけるカロッサ自身の“二重生活”が明らかにしている：国家社会主義の諸機関の枠内で、あるいはそれどころか彼らの委託に基づいて、それによって“別の”ドイツに道徳的な支援と慰めを提供するために、文学の効果を挙げうるという試みは、結局は幻想たることが判明せざるを得ないのであった。<sup>258)</sup>

#### 四) “ドイツの悲運”

辛らつな言葉できっぱりと拒絶しつつ、ハンス・カロッサは1933年の春にの

手紙の中で、“国家社会主義革命”の影響を論評している；ある手紙の中では、飾らずに、国家社会主義者たちの政権掌握後の政治的状况について意見を述べている：

わがドイツでは、現在非常に多くのことが進行しています：私たちは浄化され、純化され、濾過され、消毒され、純粹分解され、鍛錬され、秩序付けられ、あやうく書いてしまいそうになりました：疎外されると。詩人にとって良い見込みではありません。自然に似て、その最良のものを、いわば混合して生きているところで生み出している者には。<sup>259)</sup>

多くの民族主義的-保守的な志向の作家や知識人が“民族革命”の“陶醉”に没頭し、ゴットフリート・ベンのように、いわゆるレーム一揆の後によりやうく国家社会主義から離れていった間に、カロッサはかれの拒絶的な姿勢をすでに早い時期、1933年のさまざまの書簡で表明している。広まっている“暴力行為”や“現在の権力者たちの病的な状態”がそこでは話題になっており、この体制にはじめから識別しえた不法な性質にたいする言及も欠いていない：“何度も繰り返し目の前に突きつけられるのは、古い意味でのあらゆる正義が終わったことです”と1933年5月の手紙にはある。<sup>260)</sup> “この運動の背後にある、野蛮な決意”<sup>261)</sup> への内心の憂慮、そして“わたしの読者のたくさんの、たくさんのひとびとが国家社会主義者なのです”<sup>262)</sup> という仰天させるような発見が、“精神の断念がこれ以上に不気味であることは決して無か（った；C.D.註）！”<sup>263)</sup> という、諦念的な認識へと通じるのである。

国家社会主義者の権力掌握に伴う政治的变化への困惑は、当時の書簡にはまだ反映が見られるが、後年の生活報告では完全に引っ込められている。ことさらに距離を置き、平静に、関与しない傍観者という観点から、カロッサは“第三帝国”という異論の多い時代のイメージをスケッチするが、それは具体的な政治的経過を意識的に顧慮せず、そのかわりに一般的な風潮を雰囲気的に描き出そうとしている。

事が終わってから、国家社会主義は彼の視界には“ドイツの悲運”<sup>264)</sup>として、ドイツが一時的にあまねく化石化した病的な状態に移行した、<sup>265)</sup>運命的に降りかかった、類の無い時期として現れるのである。突撃隊パレードや国家社会主義の大衆行事を報告し、それによって外側からも見えてくるファッション化のプロセスを述べる多くの叙述とは反対に、カロッサは“第三帝国”に生きることの生気の無さを遅ればせに強調する。ファシズムの暴力国家における生活は“死体安置室”に譬えられ<sup>266)</sup>：“たいていのドイツ人の私生活というものは、そのころは国家的なものの中で硬直し始めていた”<sup>267)</sup>、そして、正確には特定できないある時期からドイツ国内の魂の凝集状態が凝固点に近づいて（いた；C.D.註）<sup>268)</sup>と、カロッサは主張する。“心の全般的な硬化”<sup>269)</sup>や“魂の暗闇化”<sup>270)</sup>、そして“人間の間（降りていた；C.D.註）”“大きな沈黙”<sup>271)</sup>といった暗喩的な言い換えによって、カロッサは“第三帝国”における日常生活の雰囲気イメージを伝えようと試みつつ、ドイツの住民を、宿命的に生じる“破局”<sup>272)</sup>あるいは“大洪水”<sup>273)</sup>のような自然現象の犠牲者として現出させるのである。

このような奇異な解釈の試みが免責機能をもつことは紛れもない：国家社会主義は、宿命的に逃れがたくドイツ国民を襲った病気として、“伝染病の発生”<sup>274)</sup>あるいは“疫病”<sup>275)</sup>と捉えられている。こうした臨床的領域への回避も、国家社会主義の出来事をさらに細分化して歴史的に評価したり解釈することに対して、カロッサが無能である反映だとするのなら、かかる“解説の試み”のもつ広範囲にわたる政治的機能は、やはり強調されねばならない、つまり：“それは、‘伝染病’の犠牲者は病気には責任がないが故に、関与者すべてを免責するに等しい”と Reinhard Kühnl は追求する。彼は西ドイツにおける“第三帝国”の歴史像を研究するなかで、非合理的なファシズム解釈という形式が戦後の時代すべてにおいて長く残っている伝統をもつものであることを立証している。<sup>276)</sup>

国家社会主義をなにか感染症や自然災害の発生に比較することは、Mitscherlich によれば責任回避にもっとも頻発する機制に数えられるのであ

るが<sup>277)</sup>、たとえそれがファシズム支配の成立に対する如何なる共同責任についても全般的な無罪判決の意味を有するとせよ、これは同じように、これに結びついたイメージにも有効なのである。非合理的な暴力のこのような突然で不可解な襲来は、ドイツをすぐさま全面的な同質化の状態にしてしまったのだ、と。この概念の無差別な応用はしかし、遅ればせの自己正当化の欲求に適っているのだ。つまり、“全体的支配を事物化する概念は、それ自体がすでにある種の免責機能をもつ”<sup>278)</sup> からである。

国家社会主義の暴力支配の解説のために非合理主義的な解釈を試みるという背景を置いては、その政治、社会、経済そして精神的諸前提との批判的対決を含んでいる、ファシズムの生成発展への論述は不必要である。同様に現実主義的な行動選択にたいする問いも。たしかにカロッサは後から“より高い性質の、人間らしい人間の無力さ”<sup>279)</sup> を嘆いているが、具体的に自らに問うことはないのだ。ワイマール共和国の末期ごろの多くの知識人たちのまさに“非政治的と思われる振る舞いが、そして、民族-保守的価値感覚をもちながら圧倒的な民主主義敵視という立場が<sup>280)</sup>、どの程度まで国家社会主義者たちによる権力掌握に、そして彼らのもくろんでいた同質化に寄与していたのかと。

“悪霊たちの臨席”<sup>281)</sup> に直面しては、受動的に耐え抜き、絶えず自ら慰めてよりましな時代に希望をつなぐ、あきらめの姿勢のみが意味があるように思われるのだ — 個別の退却という形式、けれどもそれは同時に、現存する勢力関係を暗黙に容認することを意味している。

“国家社会主義”が“魔法のまやかし”<sup>282)</sup> をかけていて、そのために初めからあらゆる歴史的-分析的解明から引き離されているというのでは、個々人の活動の余地は、生き方の選択がそもそも問題にならないほどに、限定されているようである。そこでただ一つの行動モデルが役に立つ：“わずかのこの冷静な人々にとって、黙って見守っていることだけが残されていたのだ、どのように、愛国的だと強調して名乗っていた人々が祖国を没落させるのかを”。<sup>283)</sup>

こうした、後年には“無力”と嘆いたが、それにもかかわらずファシズム支配の現実からわざとらしく背を向けたことと平行して、カロッサは、さらなる

神秘化を助長するような、アドルフ・ヒトラーの人物像をデッサンしている。ヒトラーは“まやかしの救世主”<sup>284)</sup>あるいは“権力ある憑かれた男”<sup>285)</sup>と呼ばれ、“大衆に(…)ある種の非常に暗い魔術を(仕掛けた; C.D. 註)”<sup>286)</sup>のだが、カロッサの評価によれば、“まさしくこのマイスター的なもの”<sup>287)</sup>が、欠けていたのである。つまり：“ヒトラーは、かれを偉大にし、節度あるようにした可能性のある、役立ちうる抵抗を、どこでも許容しなかった”<sup>288)</sup>のだ。このような不十分な特徴付けや後からの“改善提案”<sup>289)</sup>は、“理想的な専制という構成概念”<sup>290)</sup>に由来するものだが、それらよりも重要なのは、カロッサが、ヒトラーをより良い来るべき時代の開拓者だと勘違いして肯定的な役割を指摘しているテキスト箇所であるように思われる：

明らかに彼は(…), その民族を戦争と破滅とへ導くよう呼び出されていたのだが、それはおそらく、民族を将来はより深い思慮の状態のために整えることになるのだ。<sup>291)</sup>

一方では、“悪”の運命的具現として出現するヒトラーを、遅ればせの視点から一意思に反して一肯定的な、“治癒的な”作用を書き加えるという奇妙な試みは、他の箇所においてさらに具体的に述べられている。以下のような変化を、カロッサは、ヒトラーないしは国家社会主義の“功績”に入れている：

彼は、排除しようとしていたキリスト教諸派を、純粹化と自省、さらに相互理解の道を開くよう鼓舞してしまった。(…) そうして何千人もの殉教者を生み出した迫害も、この革新に力を貸したのである。

彼は数百万人のユダヤ人、大人も子供も殺させ、それによって達成したのは、全地球上のすべての善意の人間が果てしのない同情をいだいてユダヤの民を振り返ったことであった。彼の暴威がなければ、おそらくイスラエル国家はまだ全然存在しなかったのではないだろうか。<sup>292)</sup>



明確に言及され、解釈の中に取り入れられさえするファシズムの犠牲者を目の当たりにすれば、国家社会主義の時代に対して後から超政治的な、見かけは客観的な展望から浄化の機能を割当てるといふ苦勞は、もし倒錯でないのであれば、まさしく自家撞着とならざるをえない。

国家社会主義支配を歴史過渡期の必然的段階だとする肯定的な新解釈は、“将来、より深い思慮の状態を整えるため”<sup>294)</sup>、“躊躇しているさまざまの力を決断へと駆り立てる”<sup>293)</sup>ことを課題とするが、これはカロッサのファシズム解釈すべてに広範囲に首尾一貫したものである。後からの意味づけというこの種の疑わしい試みは、ファシズムの暴力支配の犠牲者をいやおうなく無視することに至る。今やこの人々はある悲劇的な歴史の更新過程における“殉教者”<sup>295)</sup>という役割を演じているのである。

カロッサのファシズム解釈の特徴をよく表している、注目すべき“同情の欠如”<sup>296)</sup>は、彼の生活報告にある免責傾向に合致している：後から、国家社会主義の時代にある種肯定的な歴史的意味がこじつけられ、その際に犯罪的政治によって引き起こされた苦しみの規模がしかるべき顧慮も評価もなされないままでありながら、同時にファシストの暴力支配の時期全体は、非合理的勢力に責任のある、遺憾な歴史的“突発事件”へと脱現実化される。これを背景にすれば、あの異論の多い期間においては自分の行為も意味を失い、より寛大な評価尺度が用いられるにいたる。この尺度は、政治的出来事に対する個人の共同責任の原則に由来するのではなく、あらゆる振舞いの評価は修正不能と見える、運命に導き寄せられた歴史的な諸制約の下における限定的な行動可能性を根底に置いているのだ。このような立場が知的な、道徳的な自己放棄に等しいとしても、しかし、この方法で“第三帝国”における自己の分裂的な振舞いは遅ればせに、ほぼ正当化されたと思われる。

カロッサが国家社会主義に後になって酌量した、カタルシスの作用は、しかしながら、彼の臓器器官学的歴史観念という関連においてのみ理解しうる。それは歴史の展開を、人間の制御や影響力の及ばない、自然現象と比較しうるひとつの神秘的な事象だと表明しているのだ。循環する歴史の流れという観念は、

それに従えば、いわば自然法則のように没落の段階と革新の段階のあいだで永続的な調整が生じているというのだが、この観念は、否定的な歴史の展開をも、運命的であるゆえに、合理的とみなすことを許すのである。

かくして、この回顧においてドイツのファシズム支配時代は、社会内部の革新プロセスの段階として把握される：

ゆっくりと作用する諸法則にしたがって、魂の深い暗黒化の時期から輝く時期が生ずる。愛が枯れ、感激が疲れ、信仰が古びるならば、想像力も衰える。そうすると、仮借ない、一切を投げ捨てる霊たちがやってきて、ネロ的な計画を開始し、悲惨のうちに終える、大衆の魔力に道を開くのだ。(…) そうだ、自由な良い霊たちの春の花は、あのぞっとする集団の妄想が消えうせた後にも開花したのだ。そしてその神聖な声は災厄の年月のあいだにもわれわれの中で止むことはなかった。<sup>298)</sup>

こうしたファシズム解釈の免責機能は、国家社会主義支配の12年間において鎖を解かれた悪魔的な諸力が結局は、悪において善を生じさせるという所業を認識しているつもりでいるのだが、見逃せないものである。自己の道徳的罪責や政治的共同責任にたいする問いには、生活報告という枠内には居場所がないか、あるいはほんの表面的にしか触れられない。それは非合理主義的歴史理解に内在する論理にしたがえば、責任ある行動は存在せず、このような歴史的“業務上の事故”に至った出来事の、運命的な連鎖があるのみだからなのである。

## 註

註の番号は、原著に付された通し番号に従う。著者 Deußen は、Carossa からの引用にあたって、主として Suhrkamp 社のポケット版による“Ungleiche Welten. Ein Lebensbericht” (Frankfurt/M, 1978) を用いている。訳者はこれとともに Insel 社版による全集 (Sämtliche Werke=S.W.), および臨川書店刊『ハンス・カロッサ全集 8』

(「狂った世界」飛鷹節 訳, 1996年) の該当箇所を示した (=邦訳)。なお、書簡については、同じく日本語訳『全集第10巻』(碓井信二 訳, 1996年) が「書簡集」の抜粋としてあり、訳出されているものにつき、「邦訳あり」としてのみ指示した。また、本文中に (C.D. 註) とあるのは、著者 Deußen 自身による補足である。

- 217) Ungleiche Welten, S.180. (S.W. II, S.809; 邦訳183p.)
- 218) 1942年5月28日付 Gertrud Full 宛書簡 (Nr.146)。In: Briefe III, S.178. (邦訳あり)
- 219) 1942年12月26日付, Fritz Klatt 宛書簡 (Nr.160)。In: Briefe III, S.194.
- 220) Ralf Schnell: "Literalische Innere Emigration". S.34 参照。
- 221) 1943年2月3日付 Carl Rothe 宛書簡 (Nr.165)。In: Briefe III, S.200.
- 222) 註219)参照。
- 223) Ungleiche Welten., S.42. (S.W. II, S.673ff.; 邦訳40p.)
- 224) Ebd., S.39. (S.W. II, S.671.; 邦訳37pff.)
- 225) Ebd., S.25. (S.W. II, S.657.; 邦訳22p.)
- 226) Ebd., S.39. (S.W. II, S.670.; 邦訳37p.)
- 227) Ebd., S.69. (S.W. II, S.700.; 邦訳69p.)
- 228) Ebd., S.38. (S.W. II, S.669ff.; 邦訳36p.)
- 229) Ebd., S.73.. (S.W. II, S.704.; 邦訳72p.)
- 230) Karl Otto Conrady, Gegen die Resignation der Dichtung und des Dichters. In: Ders., Literatur und Germanistik als Herausforderung. Skizzen und Stellungnahmen. Frankfurt/M. 1974, S.110.
- 231) 1917年1月16日付 Maria Demharther 宛書簡 (Nr.114)。In: Hans Carossa. Briefe I 1886-1918. Hrsg. Von Eva Kampmann-Carossa. Eschwege 1978, S.139.
- 232) 1932年8月25日付 Lo Shoenberner 宛書簡 (Nr.238)。In: Briefe II, S.273.
- 233) 1933年5月17日付 Katharina Kippenberg 宛書簡 (Nr.251)。In: Briefe II, S.284. (邦訳あり; 訳者注)
- 234) すでに言及した "Plan" 誌上の投書 (註166) を参照。そこでは以下のようにある:  
"能力には義務がある。能力ある人, 芸術家は共にその時代の建築家だ。(…) 彼は義務ある者としてそこに立っている。そのことは, われわれの間で残念ながら, ほとんどいつも見落とされているのだ。フランスでは特記されていることだ。(…)  
確かに, あの国でもインテリ, 精神的な人間のなかには裏切り者もいた。フランス

でも肅清はさまざまに生ぬるく行われた。ただひとつの領域の人間に対してだけは、解放されたフランスは容赦がなかった：精神的な人間に対しては。彼らがいずれか別のグループより以上に共に責任を担っていたゆえに、当然に、なのである”。(Ebd., S.516) 同じ意味で、Ludwig Marcuse は彼の自伝において“1933年に現れ、今日までまだ白状されずにいる、きわめて才能豊かなドイツの学者、芸術家の、信じがたいほどの気骨の無さ”を批判している。(In: Ders., Mein zwanzigstes Jahrhundert, S.177f.)

235) Ungleiche Welten, S.159. (S.W., II, S.788; 邦訳161p.)

236) Ernst Loewy, Exkurs über die Rechtfertigungsliteratur. S.229.

237) Ungleiche Welten, S.65. (S.W., II., S.697; 邦訳65p.)

238) Ebd., S.166. (S.W., II, S..794.; 邦訳168p.)

239) Ebd., S.141. (S.W., II, S.770.; 邦訳142p.)

240) Ebd., S.151. (S.W., II, S.780.; 邦訳152.) 参照

241) Ebd., S.141f, (S.W., II, S.770f.; 邦訳142p.)

242) Ebd., S.39. “・・・何というカタコンベ生活へと、その精神は追いやられたことか！”を参照。(S.W., II, S.671.; 邦訳37p. 以下)

243) Ebd., S.90. (S.W., II, S.721.; 邦訳91p.)

244) Ebd., S.143. (S.W., II, S.772.; 邦訳145p.)

245) Ebd., S.149. および S.144. (S.W., II, S..778; 邦訳150p. /S.773.; 邦訳145p.)

246) Hansgeorg Maier, 前掲書

247) Ungleiche Welten, S.38. 参照。“国境の向こう側から感嘆の声 (・・・), それらはどれほどに、思索的な、眼識あるドイツ人たちを沈黙させるように、加勢したことか。戦後に非難される沈黙へと。”(S.W., II, S.669.; 邦訳36p.)

248) Ungleiche Welten, S.72f. (S.W., II, S.703f.; 邦訳72p.)

249) 註241)を参照。

250) Ungleiche Welten, S.41f. (S.W., II, S.673.; 邦訳40p.)

251) Franz Schonauer, Deutsche Literatur im Dritten Reich, 前掲書.S.129. (『第三帝国のドイツ文学』小川悟／植松健郎共訳, 福村出版, 175p..以下)

252) Ebd.

253) Genno Hartlaub, 1978年12月10日付 “Deutsche Allgemeine Sonntagsblatt” 紙。以下に転載：Über Hans Carossa, 前掲書, S.438.。この関連では、以下も参照：

Hanns Arens, 前掲書, S.268.: “カロッサの自作朗読会に何千人もの人々が訪れたことを体験した人ならば, このこともわかっている: より良いドイツは, 心の奥底で, 彼の出席に感謝していたのだ, そこには「ハイル・ヒトラー」の叫びが無いことに…”

- 254) 1935年7月22日付 Anton Kippenberg 宛書簡 (Nr.303)。In: Briefe II, S.339. (邦訳あり; 訳者注)
- 255) Ungleiche Welten, S.137. (S.W. II, S.767.; 邦訳138p.)
- 256) 1939年12月9日付 Victor Wittkowski 宛書簡 (Nr.78.)。In: Briefe III, S.102. (邦訳あり; 訳者注)
- 257) うまく概観を伝えているのは, Wolfgang Emmerich の論考, Die Literatur des antifaschistischen Widerstandes in Deutschland である。In: Die deutsche Literatur im Dritten Reich, S.427-458. 前掲書。
- 258) Ralf Schnell, Literarische Innere Emigration, S.97. 前掲書。
- 259) 1933年4月28日付 Erika Mitterer 宛書簡 (Nr.246)。In: Briefe III, S.281.
- 260) すべての引用は1933年5月8日付 Maximilian Brantl 宛書簡 (Nr.248)。In: Briefe II, S.282.
- 261) 1933年7月2日付 Regina Ullmann 宛書簡 (Nr.259) 参照。In: Briefe II, S.292.
- 262) 1933年6月9日付 Valerie Carossa 宛書簡 (Nr.255) 参照。In: Briefe II, S.288.
- 263) 1933年6月21日付 Otto Heuschele 宛書簡 (Nr.258)。In: Briefe II, S.290.
- 264) Ungleiche Welten, S.7. (S.W. II, S.639; 邦訳 3p.)
- 265) 化石化 Petrifikation (Versteinerung) という概念については, Josef Rattner, Wirklichkeit und Wahn. Das Wesen der schizophrenen Reaktion. Frankfurt/M. 1976, S.28.を参照。
- 266) Ungleiche Welten, S.68. (S.W. II, S.699; 邦訳68p.)
- 267) Ebd., S.144. (S.W. II, S.773.; 邦訳146p.)
- 268) Ebd., S.130. (S.W. II, S.760.; 邦訳131p.)
- 269) Ebd., S.66. (S.W. II, S.697.; 邦訳65p. 以下)
- 270) Ebd., S.68. (S.W. II, S.699.; 邦訳68p.)
- 271) Ebd., S.67. (S.W. II, S.698.; 邦訳66p.)
- 272) Ebd., S.67. (S.W. II, S.699.; 邦訳67p.)
- 273) Ebd., S.7. 参照。(S.W. II, S.639.; 邦訳 3p.)

- 274) Ebd., S.22. (S.W. II, S.654.; 邦訳19p.)
- 275) Ebd., S.139. (S.W. II, S.769.; 邦訳140p.)
- 276) Reinhard Kühnl, Das Dritte Reich in der Presse der Bundesrepublik, 前掲書, S.63.
- 277) Alexander und Margarete Mitscherlich, 前掲書 S.28. 参照。
- 278) Wolfgang Fritz Haug, Der hilflose Antifaschismus, 前掲書 S.98.
- 279) Ungleiche Welten, S.26. (S.W. II, S.658.; 邦訳23p.)
- 280) “非政治的”と思われながら、ワイマール共和国時代（およびそれ以前）において特に大学教育を受けた市民層のすぐれて政治的な姿勢というものを Wolfgang Abendroth は論文 “Das Unpolitische als Wesensmerkmal der deutschen Universität” で追究している。In: Nationalsozialismus und die deutsche Universität. Universitätstage 1966. Veröffentlichung der Freien Universität Berlin, Berlin 1966, S.189-2-8.
- 281) Ungleiche Welten, S.105. (S.W. II, S.735.; 邦訳106p.)
- 282) Ebd., S.30. (S.W. II, S.662.; 邦訳27p.)
- 283) Ebd., S.69. (S.W. II, S.700.; 邦訳69p.)
- 284) Ebd., S.44. (S.W. II, S.676.; 邦訳43p.)
- 285) Ebd., S.98. (S.W. II, S.729.; 邦訳99p.)
- 286) Ebd., S.31. (S.W. II, S.663.; 邦訳29p.)
- 287) Ebd., S.27. (S.W. II, S.659.; 邦訳24p.)
- 288) Ebd., S.43. (S.W. II, S.675.; 邦訳42p.)
- 289) Ungleiche Welten, S.29. を参照；“ドイツ民族の運命をそのもろの手に与えられた男が、ゲーテのような人の明るい、深く人間的な、深く生命的な精神によって、自己と彼の代理人たちとを満たす能力があったならば、そのすべての政治は違っていたであろう。そして、ドイツの由緒ある町々は美しく無傷のままにいまなお残っているであろう。” (S.W. II, S.660.; 邦訳26p.)
- 290) Ralf Schnell, Literarische Innere Emigration, 前掲書, S.35.
- 291) Ungleiche Welten, S.65. (S.W. II, S.696.; 邦訳65p.)
- 292) Ebd., S.28. (S.W. II, S.659ff.; 邦訳25p.)
- 293) Ebd., S.27. (S.W. II, S.659.; 邦訳24p.)
- 294) Ebd., S.65. (S.W. II, S.696.; 邦訳65p.)

- 295) Ebd., S.28. (S.W. II, S.659.; 邦訳25p.)
- 296) Alexander und Margarete Mitscherlich, 前掲書, S.42.
- 297) これに加えて, Ralf Schnell, Literarische Innere Emigration, 前掲書, S.66. および S.67. も参照。
- 298) Ungleiche Welten, S.220. および S.222. (S.W. 2, S.848.; 邦訳222p.) および (S.W. II, S.849.; 邦訳223p. 以下)